

中高6カ年を通じた「書くこと」の指導法の開発

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

東城 徳幸・有木 大輔・澤田 英輔
関口 隆一・平田 知之・福田 孝

中高6カ年を通じた「書くこと」の指導法の開発

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

東城 徳幸・有木 大輔・澤田 英輔

関口 隆一・平田 知之・福田 孝

要約

本校国語科では、2007年度の教科研究プロジェクト「筑波大学生の『国語力』に関する意識調査」の分析結果を踏まえ、2008年度より中高各学年で「書くこと」の指導法開発に取り組むこととした。本稿ではその概要と各教員による2年目にあたる2009年度の実践を報告する。

キーワード：書くこと インベンション 具体的な読者 協働（共同） 論文・レポート作成

1 これまでの経緯と方針

1.1 プロジェクト発足の経緯

近年、「言語表現」「国語表現」などの題目で、日本語表現に関する授業が多くの大学で設置されている。これは国語におけるリメディアル教育の一環と考えられ、中高段階の国語授業で身につけるべき「国語力」が、大学生活に必要な程度にまで達していないことを意味する。

それを受けて、本校国語科では、2007年度、高大連携という視点から、筑波大学生に対するアンケート調査「筑波大学生の『国語力』に関する意識調査」を行った（注1）。「大学生にとって必要な国語力」とは何か、それは高校までの国語の授業で十分に育てられてきたのか、を問うことで、大学生のニーズを探ろうとしたものである。

アンケート調査結果の概要を以下に示す。

- ・大学生活において重要だと思う国語力（20の選択肢より5つ選択）

- 1 論文やレポートを論理的に書いて人に自分の主張を伝える力（59.4%）
- 2 相手にわかりやすく自分の考えや気持ちを話す力（55.0%）
- 3 手紙・会話等の様々な場面で適切なマナーに則って対応する力（40.6%）

- ・高校までの国語の授業で役立っているもの（自由記述）

- 1 「なし」（44%）

2 論理的な文章を読む・要約する（11%）・小論文等を書く（11%）

3 小論文等を書く（10%）

- ・高校時代までに身につけたかった国語力、やってほしかった授業（自由記述）

1 書く（30%）

2 漢字・語彙（16%）

3 読む（15%）・話す・発表する（15%）

結果から見えてくるのは、大学で必要とされる多様な「国語力」のなかでも「書く力」が大学生に重視され、また、それが高校までの指導で十分に身につけられていないと考えられていることであった。むしろ日々の中高での国語の授業で「書く力」が軽視されているということではなく、指導が行われていないということでもない。ただしその指導は書かれてきたものを教員が一人で評価・添削するというスタイルに偏ってきたのではないかという反省があった。

そこで、本校国語科では、生徒が書いてきたものを評価するだけでなく、長い時間をかけて生徒が一つの文章を書く過程に関わることを目標として、「書くこと」の指導を見直すことをテーマとして設定した。それが2008年度より取り組んでいる「中高6カ年を通じた「書くこと」の指導法の開発研究である。本年度はその2年目にあたる。

1.2 プロジェクトの基本方針

プロジェクト開始にあたって、本校国語科では以下のような基本方針を確認した。

- ①個々の実践を積み上げるかたちで全体の方向性を模索する
- ②教員の負担をできるだけ軽くする仕組みを考え、継続が可能な実践を行う。

①はより生徒の実態に即したものを目指したものである。②は教員の負担の重さが、これまでの国語教育の優れた実践の継承を阻んできた要因の一つになっているのではないかと考えから設定されたものである。さらに、このような実践が積みあがった段階で、できれば中高6年を通じた「書くこと」のカリキュラム開発を視野に入れる。

昨年度はこれをもとに各教員の授業が実践された。詳細な経過の報告はここでは省くが、結果として以下のような共通の課題が浮かび上がった（注2）。

- A インベンション指導（アイデアを出し、構成を整える段階での指導）を重視する
- B 具体的な書き手と読み手がいる場を重視する
- C 共同的な作業を重視する

1.3 本年度の方針

今年度は上記の問題意識を共有しつつ、基本方針を念頭にそれぞれの教員の関心から「書くこと」の実践を重ねることとした。

ただし、大学生生活に直結するようなかたちでのレポート・論文作成の指導を取り入れることも検討課題として挙げられた。これは、2007年度のアンケート調査結果の「大学生生活において重要だと思ふ国語力」である「論文やレポートを論理的に書いて人に自分の主張を伝える力」にもとづいた、当初のテーマ設定に即すものでもある。そのため、高校段階での目標として以下を方針として加えることとした。

- 大学生生活に直結する論文レポート作成のための基礎的能力を育てる実践を取り入れる

2 2年次の実践報告

2.1 各実践の概要

学年（教員名）	実践テーマ
実践内容の概要	
中1 国語（有木）	コピーの発想法
ポスターや広告などからコピーの効用を学び、どのような工夫がなされているかを分析し、意見を述べあう。その後、実際にコピーを作り、クラスで批評する。	
中2 国語（澤田）	作文ワークショップ
生徒の自己評価や協働的活動を学習にどう導入するかを重視しながら、作文ワークショップを行う。グループ別に生徒どうしの作品検討会を重ね、話す・聞く力を高めることや、グループ活動の質を自ら反省し、高めていく力をつけることを意識した。	
中3 国語（関口）	小グループでの発表用原稿作成
各自で「武蔵野の風景」（内山節）を読み、筆者の考え方を踏まえた上で批判的に検討。それを持ち寄って一本化し、グループの発表用原稿を作成する。その後、グループどうしの相互評価と、自らのグループの振り返りを行う。	
中3 国語（東城）	グループ討議と意見文作成
10項目の「権利」について、グループで討議し合意形成をはかりながら大切な順に並べる。その過程で自らが大切だと思う権利とその根拠を明確にしていき、意見文を作成する。最後に意見文をお互いに読み合いながら、より説得力のある文章の書き方を全体で検討する。	
高2 ゼミ（東城）	ゼミナール形式の授業から論文作成へ
「三四郎」（夏目漱石）について、先行する研究論文のレビューを作成する。さらに、ゼミナール形式での相互批評を通じてレビューの精度を高める。それを通じて論文・レポートの内容や形式の学習を目的とする。	

高2ゼミ…総合学習ゼミナール

2.2 方針・課題との関わりから（まとめにかえて）

方針の項ですでに述べたとおり、昨年度の実践からA・B・Cの3つの共通課題を設定した。今年度の実践はそれを意識しつつ行われているため、教科全体としてのありがたが見やすくなった。書くべき内容を書き手自らが見つけ出すまでの段階を重視したA「インベンション指導」については、中3東城の授業で生徒

どうしの合意形成を通じて、自らの意見が明確になっていく過程を重視するという田中宏幸氏の実践を参照した実践が行われている。なお、ここに挙げずとも日常的な授業でブレインストーミングなどの手法を用いてインベンション指導は行われている。

また、「B具体的な書き手と読み手がいる場を重視する」ことは、生徒どうしの読み合いを重視している点で全ての教員が行っていることである。教員という一人の読者だけでなく、隣にいる友人という具体的な読者を想定することで、生徒がより明確に読み手を意識した文章の書き手となり成長することを期待している。

Bとも直結することだが、「C共同的な作業を重視する」については、それぞれの教員が「検討会」「グループ活動」「相互批評」というかたちで必ず取り上げていることである。検討・批評される側の書き手の成長を期待することはもちろん、共同的な検討や批評の作業を積み重ねていくことで、読み手としての生徒が他の生徒の作品や文章を評価する力を養うことを目指している。これは同時に②の基本方針である、教員の負担を減らすことで継続的な指導を実現することにも寄与している。

共通の課題を持って実践に取り組んだことで、昨年度より教科全体の指導の方向性が明確に提示できたと考える。来年度で「書くことの指導」研究開発は3年目に入る。これで中学・高校の3年が一巡することになる。本格的な成果の報告を目指し、できればカリキュラムの枠組みを示したい。

なお、今年度より加わった方針である「大学生活に直結する論文レポート作成のための基礎的能力を育てる実践」については、以下に個別の実践例を示す。

3 2年次の実践例

3.1 ゼミナール形式から論文作成へ

すでに述べたことだが、今年度、方針として新たに加えたことに「大学生活に直結する論文レポート作成のための基礎的能力を育てる実践を取り入れる」を挙げた。ここではその実践例として高2ゼミナールで行われた「ゼミナール形式の授業から論文作成へ」を取り上げる。

- ・授業者：東城徳幸
- ・テーマ：大学生活に直結する論文・レポート作成能力の養成
- ・対象生徒：本校高等学校2年生 8名

- ・授業数：平均月1回 各3時間程度
- ・授業形式：高校2年ゼミナール
(総合的学習の時間 高校2年生：ゼミナール → 高校3年生：テーマ研究)

「ゼミナール」とは本校が高2総合学習の一環として行っている授業である。担当の各教員はそれぞれ異なったテーマの講座を開講し、生徒はそれぞれの興味に応じてそれらの講座から一つを選択する。授業形式は担当教員に委ねられるが、文系教科であれば概ねテーマに関する報告と議論からなるゼミナール形式の授業を行っている。高3に進級してからは高2と同様にそれに近いテーマで「テーマ研究」を行う。これは大学における卒論にあたるものとイメージしてもらってよい。生徒各自の執筆進度に合わせ、教員が適宜アドバイスをを行い、最終的に論文のかたちにさせる。

今回の授業構想で取り上げるゼミナールは、実際に論文を執筆する準備段階にあたり、論文・レポートを書くためのトレーニングを行うには最適な授業である。また、少人数制であり、各生徒に教員の目が届きやすく、それぞれの生徒は自らの興味のあるテーマを選んでいるためモチベーションの高さが期待されることが試行的な授業に適している。以下、実際の時系列に従って実践を報告する。

3.2 授業まで

3.2.1 準備段階

世に大学生向けの論文・レポートの手引きは多く、特に近年は大学での指導内容をもとにした書籍の出版が目立っている。まずは数多ある大学生向けの論文・レポート作成の入門書から、「近代の小説を論じる」というゼミ内容の大枠と親和性の高い以下のA~Fに文献を絞り込み論文・レポート作成指導に関する傾向を把握した。結果、半数以上の文献が論文指導の要件として挙げていた以下の表の1~6項目を中心に授業を組み立てることとした。

	1テキスト ト読解の 方法	2情報の収 集・整理の 方法	3テーマ 設定の 方法	4論文 の要件	5論文 の構成	6形式 面での 注意
A		○	○	○	○	○
B				○	○	○
C	○		○	○	○	
D	○			○	○	○
E	○	○	○	○		
F	○	○		○	○	○

- A 『近代文学・現代文学 論文・レポート作成必携』（學燈社、1998）
 B 山内志朗『ぎりぎり合格への論文マニュアル』（平凡社、2001）
 C 河野哲也『レポート・論文の書き方入門』（慶応義塾大学出版、2002）
 D 戸田山和久『論文の教室』（NHK出版、2002）
 E 佐藤望ほか『アカデミック・スキルズ』（慶應義塾大学出版、2006）
 F 松本茂ほか『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」』（玉川大学出版、2007）

3.2.2 2年間の授業の基本的な設計

上記6項目は実際に論文を書くまでの準備にあたる1・2・3の項目と、実際に論文を書く際のルールや作法を示した4・5・6に分けられる。そこで、論文のテーマ決定にいたるまでの高2ゼミナールでは表の1～3を中心に扱うこととし、実際に論文を執筆する高3テーマ研究では4～6を中心に扱うこととした。むしろ4～6の内容は1～3を扱うなかでも補足的に示すことになる。

続いて、本年度の高2ゼミナールで生徒が身につけるべき能力は何かを検討し、上記の文献から以下の内容を抽出した。

- ①学術テキストのスタイルを学び、また学術的テキストの内容を批判的に読む力
- ②web上のデータベースや図書館を有効に利用し、情報収集・文献収集を行う力
- ③自分のテーマを先行する学術的テキストとの対話のなかから明確にしていく力

①は、どの学問分野に関わらず、生徒自身のテーマを形成する際にかかせない手続きであり、また、論文・レポートのスタイルのルールを学ぶことにもつながる。

②は文系の学問分野で特に重要なスキルであり、インターネットが成熟した現在では多くの文献情報がWeb上で公開されている。また、貴重なテキストも電子テキスト化され公開されつつある。それらにアクセスするだけでなく、適切に使いこなし情報を選別する技術を含む。③は①と並んで、生徒自身のテーマを深めていく際にかかせない手続きで、読書方法の意識化を目指すものである。

これらを実現するための具体的なトレーニングとして、ゼミナールのテーマに関し、先行する学術論文へのレビューの作成と、webデータベースの検索や図書館での資料収集の実習および読書指導を行うこととした。また、次にこれをもとにして各自のテーマの芽を育てさせ、発表させるゼミ形式につなげることとした。

3.2.3 この時点での課題

上記のような方向性が見えたところで、課題として整理したのは次の2点である。

- ①大学生向けの論文・レポート作成の方法をそのまま高校生に適用してよいものか
- ②学術テキストへの生徒の抵抗感を減らすにはどうすべきか

①については、問題点は必ず出てくるであろうし、一方でこちらの期待以上に生徒が適応することもあるだろうと予想された。しかし、この授業が試行であることから、そのまま適用することとし、見えてきた課題を次に活かすこととした。

まず解消しなければならなかったのは課題②であった。たとえば、普段の授業では、ある作品について文献を調べながら自分の意見を鍛えさせ、述べさせようと思っても、先行文献の単なる引用にとどまってしまうことがある。そういう場合に生徒から決まって出るのは、「専門家がこういう説を述べているのだから、一介の中学生・高校生が付け加えて述べることなど何もない」という言葉である。そこで、生徒に課題を提案する際に、できるだけ彼らの学術的な文献に対する抵抗感を軽減し、自分の意見を鍛える動機があたえられるような仕掛けが必要となる。

今回、そのような仕掛けに用いたのは、「自分の所属している学校の先輩が書いたものを読み、後輩としてそれを乗り越えていく」という動機づけである。そこで、多くの学術的な文献が揃っている夏目漱石「三四郎」の読解をゼミナールで行うこととし、本校のOB

が夏目漱石の作品について言及したものを生徒のレビューの対象として提示した。以下、その実際を示す。

3.3 授業の実際

3.3.1 スケジュール設定

年間のスケジュールは以下の表の通りである。第2回授業でレビュー作成にむけての講義を行い、インターネットを使った文献情報検索と、図書館で資料を集める実習を行った。夏休みの準備期間をはさみ、第3回授業でレビューの発表ならびに批評を行った。それ以後の回は各担当者の関心に沿った発表と質疑応答を行うこととした。

回	月日	時限	内容	発表者	司会者
1	6/13	3・4	ゼミナール概要		
2	6/27	1～4	講義「文献の集め方と読み方」		
			図書館での実習		
3	9/12	1・2	発表(東論文)	A・B	
			発表(石井論文)	C・D・E	
			発表(若林論文)	F・G・H	
4	10/17	2～4	発表①(1・2章)	A	教員
			発表②(3章)	B	G
			発表③(4章)	C	F
5	11/14	2～4	古書店街散策(神保町)		
			文学散歩(本郷)		
6	1/9	2～4	発表④(5章)	D	E
			発表⑤(6・7章)	E	D
			発表⑥(8・9章)	F	C
7	1/23	1～4	発表⑦(10・11章)	G	B
			発表⑧(12・13章)	H	A
			講義「卒業研究の進め方」		
※	未定		OBとの懇話会		

3.3.2 授業内容

先の課題を解決するための仕掛けとして、「自分の所

属している学校の先輩が書いたものを読み、後輩としてそれを乗り越えていく」という動機づけを挙げた。それを具体的なかたちで生徒に提示したのがゼミナールの始まる前のオリエンテーションの段階である。(後掲資料「2009年度ゼミナール案内」)。そこでは、学術的な文献を読むための動機づけとして、「自分の先輩が何を考えてきたのか」を知るために読むということ提案し、また、自らのテーマ発見への動機づけとして「先輩と対話する」「先輩を乗り越えるためにはどうしたらよいか」を考えることを提案した。

第2回目に、先行する学術文献をどうすれば批判的に読むことができるのかを講義のかたちで提示した。同時に、レビューのまとめ方を具体的に教えた(後掲資料「筑駒の先輩が書いたテキストについてコメントする」)。このプリントの作成に際しては、準備段階で参照した文献CおよびFに多くを拠った)。この段階で中学校～高校1年までの通常授業での香西秀信『反論の技術』や、野矢茂樹『論理トレーニング』などを用いたトレーニングと批判的な読解の連続性を意識させている(注3)。

夏休みを準備期間として、第3回目に生徒によるレビュー発表と別の生徒によるフィードバック(後掲資料「生徒のレビュー」「フィードバック」)を行った。

レビューの対象として取り上げた文献は、東浩紀「写生的認識と恋愛」、石井洋二郎『身体小説論』の一部、若林幹夫『漱石のリアル』の一部、計三篇である。文芸批評、文芸社会学、都市社会学といった異なる立場から「三四郎」を論じたもので、なるべくバラエティーが出るようにした。それぞれの関心や資質に基づいて取り上げる文献を選び、レビューを作成させた。

また、一つの文献について複数のレビュー作成担当者を配した。複数の生徒が同じ文献のレビューをつくることで、人による視点の違いや巧拙を知ることにつながらなかったからである。

フィードバックとして、発表者に対する質疑のほか、改善点を中心に指摘した「コメントシート」を用意した。

3.3.3 今後の課題

この実践は、高3時に卒業テーマ研究が書かれてはじめて成果や課題が明らかになるもので、まして年度も終了していない本稿執筆時点でそれらをまとめる段階にはない。しかし、現時点で感じている課題を述べ

ることでそれに代えたい。

先に示した準備段階での課題である「②学術テキストへの生徒の抵抗感を減らすにはどうすべきか」に関しては、概ねクリアできたように思う。生徒の取り組み意識は概ね「駒場の先輩たちが、文学をどのような観点からどのように評価し、議論したか、とても興味があります」（ゼミナール開始時、生徒に調査した志望理由から引用）というものであったようである。今後アンケートなどでさらに意識調査をしていきたい。

生徒の動機づけが成功したように見える一方、そのことと適切なトレーニングとをうまく組み合わせることができるのかどうかということには不安が残る。今回、生徒にレビューを作成したいテキストを選択させたが、それが論文・レポート作成のトレーニングに適したテキストになるとは限らないということである。本来、学術的なテキストのスタイルを学んだり、また、それらを批判的に読む力をつけたりするためには、まずは明快な構成を持っていたり、分かりやすい欠点があったりするテキストを選ぶべきである。今回は上記②の課題のクリアを主眼においたため、『反論の技術』や『論理トレーニング』を用いた授業との連続性を意識させるにとどまり、過程を省略せざるをえなかった。動機の部分と、順を追ったトレーニングの部分とは本来両立可能なものであるはずで、今後の課題としたい。

【注釈】

- 1) 筑波大学石塚修准教授・塚田泰彦教授の協力のもと行われた。アンケート調査結果など詳細は「筑波大学附属駒場論集 47 集」（2007）で報告した。
- 2) 初年度の実践の詳細は「筑波大学附属駒場論集 48 集」（2008）で報告した。
- 3) 教科研究プロジェクトとは別に、SSH指定校国語科としての研究開発として、中学校段階での「論理的思考力の養成」を目指している。『反論の技術』や『論理トレーニング』を用いた授業はその一環でもある。詳しくは「平成19年度指定SSH研究開発実施報告書」第1年次（2007）および第2年次（2008）を参照のこと。

【参考文献】

1. 松本茂ほか(2007)『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」』玉川大学出版。
2. 河野哲也(2002)『レポート・論文の書き方入門』慶応義塾大学出版。
3. 田中宏幸(1998)『発見を導く表現指導 作文教育

2009 年度 高校 2 年生 総合学習 H 《ゼミナール》 実施内容

教科名	国語	名称	漱石ゼミ「筑駒生は漱石をどう語ってきたか、そしてどう語るのか。」
担当者名	東城 徳幸	受講生人数	10人 程度
使用教室	<input checked="" type="checkbox"/> 普通教室 (221) <input type="checkbox"/> 特別教室 ()		
〈 実 施 内 容 〉			
<p>イタリアの小説家イタロ・カルヴィーノは、「古典」の概念について次のように述べています。</p> <p>古典とは、私たちが読むまえにこれを読んだ人たちの足跡をとどめて私たちのもとにとどく本であり、背後にはこれらの本が通り抜けてきたある文化、あるいは複数の文化の足跡をとどめている書物だ。(須賀敦子訳)</p> <p>近代の日本文学の中でこの言葉にふさわしい作品を選ぶとしたら、夏目漱石の諸作を外すわけにはいかないでしょう。漱石の諸作ほど多くの人に読まれ、かつ語られてきたものは類例がなく、例えば国立国会図書館には漱石関連の書籍が2000冊以上も収蔵されています。諸君はいま「筑駒」という共同体・文化に帰属していますが、「筑駒」の人々もやはりまた漱石を読み、考え、語り、そして数多くの言葉を書き残して来ました。</p> <p>本ゼミナールでは、「筑駒(教駒)」の先輩たちが漱石の諸作について書き残した言葉を読み、それらを継承しつつ、批判的に乗り越えて行くことを目指します。授業はゼミ参加者のレポートと質疑応答を中心とします。具体的には、諸君に次のようなことを行ってもらいます。</p> <p>① 漱石の三部作(「三四郎」「それから」「門」)を論じた文章を取り上げ、批判的に読解し、レポートする。(取り上げるのは、東浩紀「写生文的認識と恋愛」、若林幹夫「動く世界—「三四郎」から」、石井洋二郎「遅延する身体—夏目漱石「三四郎」を読む」など。)</p> <p>② ①をふまえて、作品に関する独自の論を立論し、レポートする。また、参加者の質疑に答える。</p> <p>①・②に併行してゼミ担当者からのレクチャーを受け、立論に必要な技能(文献収集・読解の仕方)や知識(文学史・研究史、批評理論)を習得してもらい、来年度のテーマ研究に備えます。ところで、カルヴィーノはこうも述べています。</p> <p>古典とは、人から聞いたりそれについて読んだりして、知りつくしているつもりになっても、いざ自分で読んでみると、あたらしい、予期しなかった、それまでだれにも読まれたことのない作品に思える本である。</p> <p>このような「古典」との幸福な出会いが、諸君に訪れることを願っています。</p>			
備考	<p>《校外での活動・外部講師の予定など》</p> <p>①図書館での実習(都立中央図書館)</p> <p>②古書店街めぐり・文学散歩(神保町・本郷)</p> <p>③OBとの懇話会?</p>		

資料 生徒向けのゼミ案内

筑駒の先輩が書いたテキストについてコメントする

0、読書の仕方

- ①鑑賞（鑑賞的読書）
- ②速読（通覧的速読）
- ③批判的読解

1、目的

- (1) 小説の読み方（著者の解釈の枠組み・考え方）を学ぶ
 - (2) 著者の主張を小説とつきあわせて検討し、その可能性と限界を指摘する。
 - ・本当にうまく小説を理解できるのか
 - ・設定した問題が解決できているのか
 - ・見落としてしまうものはないのか
- 知識の習得と、自分自身の読み方（解釈の枠組み・考え方）の形成を橋渡すトレーニング

2、コメントの仕方

(レジュメの例)

表題	学年・組・氏名
<p>(1) テキストの紹介</p> <ul style="list-style-type: none">・どんなテキストについての批評なのか、著者がどんな議論をしているのかをごく大まかに説明する。	
<p>(2) テキストの要約</p> <ul style="list-style-type: none">・テキストの順を追って要約する。ただし、メリハリをつける。・テキスト中の重要な用語などについては説明し、テキスト理解に役立つと思われる解説を入れる。	
<p>(3) 問題の提起</p> <ul style="list-style-type: none">・著者の主張のうち中心的・重要と思われる点を1、2点挙げる。・それについて問題提起を行う。	
<p>(4) 議論</p> <ul style="list-style-type: none">・(3)で提起した問題について議論を展開する。・自分の主張を根拠づける。	
<p>(5) まとめ</p>	

東浩紀「写生文的認識と恋愛」を読む

二年二組

(1) 概要

- ・この文章は批評家東浩紀氏が1993年に執筆し、1994年5月の「漱石研究」第二号に初出のものであり、本文は朝日文庫「郵便的不安たちⅡ」(2002)による。
- ・この本は、著者の「存在論的、郵便的」(新潮社)という単行本と、コインの表と裏をなしている(単行本あとがき)。よってその本の主題となっているジャック・デリダの哲学が通底していると考えて間違いない。
- ・著者はこの文章で「漱石は近代的な恋愛の制度化と、その必然性を問うていた」と述べている。

(2) 要約(丸は形式段落)段落分けは意味段落のまとまりを考慮した。

- 1 「三四郎」における広田先生が言う「二十世紀の偽善」(美禰子)は善悪が単純に判定できない(①)。なぜなら、そもそも判断の基準となる本性などないからである(②)。またそうしたものが無いのが三四郎の世界である。「内面」=本性は、近代文学が制度的に作り上げたフィクションである(④)。広田先生は二十世紀の偽善家は徹頭徹尾外面しか持たないとしている(⑤)。「行人」においても、お直の「本心」など何処にもない(⑥)。しかし、「三四郎」において三四郎は美禰子に振り回されるだけなのに対し、「行人」において一郎はお直の言葉を「内面」のレベルだけに限定したい(⑦)。

内面と外面の未決定性は発話の構造そのものに起因する(⑧)。すなわち、発話は常にコンスタティヴ/パフォーマティヴの二つの解釈を許容することから生じている(⑨)。例えば、「道草」においては健三の養父母の質問が、その未決定性から健三のアイデンティティの不安を生んでいる(⑩)。人は内面において記号に依拠しており、記号はつねに複数の解釈を許容する(⑪)。「無意識」は具体的なコミュニケーションのなかでのみ、他者の介在のもとでのみ現れる(⑫)。つまり、一つの発話は正反対の解釈(無意識)を許容し、そのことは他者の応答により見出される(⑬)。

漱石は、社会小説であると同時に心理小説であるような作品を書こうとして発話のポリフォニー(未決定性)の問題が最も先鋭的に問われる恋愛のテーマを執拗に描いた(⑭)。「三四郎」の創作では主人公と他の登場人物の個人同士の関係と社会的関係性を描くことを目指した(⑮)。三四郎において試みられているのは、事態を常に複数のレベルでみる写生文的認識から、発話の未決定性(ポリフォニー)をそのまま写し取る「写生文」と呼ばれる文体である。

- 2 写生文家は写生文的認識に立つと同時に「内面」に言及するという自己矛盾にとどまる必要がある(①)。恋愛を写生文的認識によって捉えるということは、写生文を放棄することを意味する(②)。三四郎は写生文であるがゆえに写生文にはなりえなかった(③)。

「それから」以降漱石は「近代」の制度性ではなく、必然性を解明しようとし

コメントシート

氏名	コメントするレポート
	東浩紀 写生的認識と恋愛を語る

※相手のレポートに対し、以下のような点について検討し、コメントして下さい。

- (1) 優れていると思う点
- (2) 疑問に思う点・分かりにくい点
- (3) 改善できる点

- (1) 要約がすっきりとしていて分かりやすく、問題の提起となるポイントがつかみやすい。これにより、全体の議論が分かりやすくなっている。
- (2) 「内面」などの前提知識が乏しい人には、東が何を言っているのか、そもそも何を言っているのかよく分からないように思う。
- (3) 東がこの文章を書くことになった一定のパースペクティブを考慮できれば、さらに分かりやすい内容のものができると思う。また、教員のテキストからの引用を議論に織り込めば、さらに有効な議論を構築できると思う。

資料 生徒のレビューに対する別の生徒によるフィードバック